式　辞

真っ白な残雪を頂く八甲田の峰麗しくも、雪深い冬遠のき、八幡岳を仰ぐここ舘野が原の陽光に満ち、一帯の草木が青に緑に目覚めるこの佳き日。

御来賓の皆様の御臨席を賜り、保護者の皆様とともに、入学式を迎えましたことは、この上ない喜びであり、教職員を代表し、厚く御礼申し上げます。

ただ今、入学を許可いたしました１０７名の生徒の皆様、御入学おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

本校は、「敬愛」・「勤勉」・「創造」の校訓のもと、大正１５年（昭和元年）に七戸町立実科高等女学校として開校し、今年で九十七年目を迎える県内屈指の伝統校です。また、平成八年に県内初となる総合学科を開設し、既に四半世紀を経、昨年１０月には、本校生徒会館に居住地に関わらず本校生徒のために七戸町が運営する七戸公営柏葉塾が開校されるなど、教育に対する地域の多様な願いに応える高校として、多種多彩な教育活動を推進しております。

この３月時点の卒業生は１５，７２０名を数えます。そして、３年後。皆さんは１６，０００名を超える卒業生の一人となります。

ここで皆さんの入学に際し一編の詩を紹介します。

私は一本のローソクです
もえつきてしまうまでに
なにか一ついいことがしたい
人の心に
よろこびの灯をともしてから死にたい

（「10 代の君たちへ　自分を育てるのは自分」東井義雄　より）

この詩はある知的障碍者の方が書いたのだそうです。

高校生と話をするとよくこんな言葉を聞きます。「どうせ～」という言葉です。この言葉の後に続くのは「無理」。「どうせ」の後に続くのは、あきらめ、不満、投げやりな言葉です。皆さんは、どうですか。では、今読んだこの詩はどうでしょう。障碍を抱え「どうせ一本のローソクだから」という思考でしょうか？それは、ちがいますね。ここには強い意志と希望があります。

先日の入学予定者説明会で、私は皆さんに覚悟を決めてこの日を迎えるようにとお願いしました。皆さんが、自分の意志で七戸高校を選び、ここで学ぶことを決めたのです。自分の生き方を決めるのは、自分しかありません。

これから高校で学ぶということは、どれだけ覚えたか？または、どれだけ知らないのか？を人と比べ、競争して、順番をつけて、「頭がいい」とか「頭が悪い」とか、そんなレッテルを張るための勉強ではありません。何ができて、何ができていないのか？を確認し、できることを増やし、身につけて行く。そして、理解していること、できることをどう使うのか？学んだことを人生や社会に生かそうとする人間性を自分自身で育てて行くこと。

つまり、七戸高校での勉強は、「どうせ」ではなく「自分が何かしたいと思ったら、「きっと」だれかによろこびの灯をともすことができるのだ」と信じて学びを継続することなのです。

さて、本校では、今年から、皆さんが今、並んでいるように、性によらない名簿を採用しました。制服も男女で指定するのではなく選択制にしました。頭髪など校則の規程から極力、男子、女子、という言葉を削除しました。2021 年の日本のジェンダーギャップ指数つまり男女格差は、156 か国中 120 位。先進国では最低です。アジア諸国の中でも韓国や中国、ASEAN 諸国より順位が低い結果です。七戸高校での取り組み

は、小さな一歩ではありますが、多様性を尊重し、人権を大切にするこれからの社会づくりに「きっと」つながります。本校教職員と皆さんで「どうせ」ではなく、何かをすれば「きっと」変わる。そんな本当の学びを目指して行きましょう。

保護者の皆様。本日は、おめでとうございます。この度は、感染症対策のため簡素な式典といたしました。しかし、私ども教職員は、この出会いを大切にいたします。そして、一人一人のお子様の人格を尊重し、皆が充実した高校生活を送り、３年後、ここで、笑って卒業して行くよう、その個性と能力をしっかりと伸ばして行くことをお誓いいたします。至らぬ点もございますが、御協力を賜りますよう何卒お願い申し上げます。

結びに、本日御列席いただきました御来賓の皆様方に重ねて感謝の意を表しますとともに、あらためまして、１０７名全ての新入生の皆さんの高校生活が実り多いものとなることを祈念し、式辞といたします。

令和４年４月７日

青森県立七戸高等学校

校長　森田勝博